慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「都市の公共性」によせて
Sub Title	
Author	熊田, 俊郎(Kumada, Toshio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 都市の公共性
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「都市の公共性」によせて

熊田　俊郎

本特集は、2010 年 7 月 10 日慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催された三田社会学会大会における同タイトルのシンポジウムをもとにしたものである。まず当日の企画趣旨と報告の概要を再掲する。

テーマ：都市の公共性

［企画趣旨］

本シンポジウムは、三田社会学会元会長藤田弘夫氏の追悼の意を込めて都市関係で何か企画できないかと、幹事会で話し合われたところから始まった。晩年の藤田氏はそのキーワードを「権力」から「公共性」に移したかのように、都市と公共性に関する議論を活発化させていた。

藤田氏を離れて考えても、今日公共性の議論が盛んである。社会が複雑多様化し、「公共の福祉」の担い手が政府部門に止まらなくなったことがその一因といえる。またグローバリゼーションが否応なく進展する中で、かつて文化圏ごとに異なる公共性が考えられたものであるがそうした複数の公共性が相互に影響せざるを得なくなっている。一方で人々の意識も同時に一挙に変わるものではない。公共性はそのようなダイナミズムをはらんでいる。藤田氏は大上段からの議論だけではなく、現実に生活している人々が公共性をどのようにとらえ、活動しているのか明らかにしたいと公共性の研究会を組織した。当然のことながら、密度が高く共同領域が大きな部分を占める都市を素材にした公共性の議論が中心を占めた。

シンポジウムは、パネリストとして上記研究会から田中重好、西山志保両氏、研究会外から吉原直樹氏をお願いし、3 氏をよく知る黒田氏、大矢根氏にコメンテーターをお願いした。「都市の公共性」というテーマで、公共性の現状と揺らぎを何らかの形で示せればと考えている。

［パネリスト］

田中重好（名古屋大学）　共同性から公共性へ

西山志保（立教大学）　イギリスのガバナンス型まちづくりと市民セクターの役割変化―社会的企業の台頭と公共性の再編―

吉原直樹（東北大学）　「市民」であることのむずかしさ：「弱い敵」との共存を拒否するアジェグ・バリの現場から

熊田俊郎「特集「都市の公共性」によせて」
『三田社会学』第 16 号（2011 年 7 月）1 - 3 頁

［コメンテーター］
黒田由彦（名古屋大学）
大矢根淳（専修大学）

［コーデイネーター］
熊田俊郎（駿河台大学）

さて読者は、この全体タイトルを見て疑問を感じるかもしれない。「都市の公共性」とは「都市自体が持つ公共性」を念頭に置いているのか「都市における公共性」を取り上げようとしているのか。筆者がこのタイトルをつけたとき、あえてあいまいにしていた。さらに言えば、もう一つ「都市を素材にした言論の公共空間」を提供できたらよいなという勝手な思いがあった。故・藤田弘夫氏は強力な磁場を作り、多くの人を惹きつけて議論の輪を作った。それは決して藤田理論を演繹検証しようとする古典的な学派ではなく、藤田氏の意見に同意不同意様々な議論を惹きつける場であった。藤田氏の追悼を志向するなら、そのような場を提供してはどうかという個人的な思いがあった。

メンバーは「企画趣旨」に記したとおり、藤田氏の研究会を軸にその内外からお願いしたというということであるが、若干補足したい。田中重好氏は研究者となってから藤田氏の磁場に惹かれて深く関係を結ぶようになったおひとりである。現在田中氏は藤田氏の研究会を引き継いでいる。筆者の立場も田中氏の立場に近い。西山志保氏は藤田氏の最初の弟子である。弟子が師に比べてはるかに緻密な実証研究に向かうということは、しばしば師弟関係にみられる現象である。西山氏の場合がこの一般事例にあたるのかどうかわからないが、ともかく豊富な実証研究をもとに社会的企業など今日的な公共領域の創生に積極的な発言をしている。藤田氏の影響下にあるものだけでは身内の議論に終始してしまう恐れがある。そこで藤田をよく知る方として吉原直樹氏にお願いした。吉原氏は言うまでもなく、藤田氏とともに矢崎武夫門下を代表する俊英であり、筆者の世代からすると二人は仰ぎ見る先輩であった。一見学界動向に頓着しないように見える藤田氏に対し、吉原氏は常に我が国の都市社会学の動向をリードするおひとりであった。比較的新しいところではローカルガバナンスや公共性に発言されている同氏がどのようなことを考えておられるのか興味があった。そして大矢根淳氏、黒田由彦氏にコメンテーターをお願いした。藤田氏はその都市論の最初を「都市は飢えない」という命題から始める。災害を専門とする大矢根氏は藤田都市論をどう見るのか興味があった。黒田氏は公共性について活発に発言しておられ、また中国社会に造詣が深い。三田社会学の外からの立場でコメントをお願いした。今回諸般の事情で黒田氏の原稿を盛り込めなかったが、当日貴重なコメントをいただいた。

今回本特集に３本の論考と１本のコメントをいただいた。いずれも興味深い力作である。全

体として「言論の公共空間」を提供できたかどうかについては、一に企画者である熊田に責任がある。大矢根氏のコメントに、藤田氏をめぐってどのような人間関係のネットワークが形成され、それをもとに研究活動が行われたか生き生きと語られている。本特集もそうした活動の場のひとつと位置付けられれば、シンポジウムを企画した目的は達成できたといえよう。

最後に、藤田氏は三田社会学会のほか、地域社会学会、関東都市学会の会長を務めた。今回のシンポジウムのパネリスト、コメンテーター、企画者はすべて地域社会学会の会員である。現在吉原氏が地域社会学会会長をしておられる。また関東都市学会では「都市と権力：藤田都市論から権力を学際的に考える」（2010 年 5 月 29 日、慶應義塾大学）と題するシンポジウムを行った。

（くまだ　としお　駿河台大学）